

在日コリアン女性の子育てにおける選択と調整

再帰的な思案のプロセスに着目して

ウィックストラム由有夏

1. はじめに：研究の背景と目的

在日コリアン女性の子育てをめぐるのは、家事・育児責任の女性への集中というジェンダーの問題に加え、子どもが差別に直面する懸念や学校選択をめぐる葛藤といったエスニシティに関わる課題が指摘されてきた（アプロ女性ネット 2018; ウィックストラム 2026 ほか）。筆者を含め複数の研究者たちはこれまで、こうした複合的制約のもとで女性たちがいかに判断し、選択してきたのかを、「主体性（エージェンシー）」の視点から分析してきた（徐 2024 ほか）。たとえば、女性たち自身の被差別・被抑圧経験を参照し、家族の反対に直面しつつも子どもの通学先を選択してきた事例への着目などがある（ウィックストラム 2025）。このように、これまで環境や状況を変化させる行動を主体性の発揮として理解してきたが、主体性を可視的な行動変化としてのみ捉える視座には限界があるのではないか。外部からは行動として顕在化しない場合であっても、女性たちは日常のなかで葛藤し、可能性を吟味しながら判断を重ねている。そうした熟考や意味づけの過程は、主体性のあり方としてどのように位置づけられるのだろうか。本稿はこの問いに応えるため、在日コリアン女性へのライフストーリー・インタビューをもとに、三名の女性の事例を取り上げる。とくに、行動として可視化されない「再帰的な思案プロセス」に着目し、自身の経験や他者との関係を参照しながら、可能性や役割の意味を問い直していく過程が、子育て実践やケアの引き受け方をどのように形づくっているのかを明らかにする。

2. 分析枠組み

在日コリアン女性の子育てにおける判断過程を理解するために、本稿ではギデンズの再帰性概念（Giddens 1991）を限定的に援用し、制約下における「思案」に焦点を当てる。ここでいう再帰性とは、構造的条件のもとで、自己や状況を継続的にモニタリングしながら、行為の可能性やその意味を問い直していく過程を指す。主体性はしばしば、状況を変化させる行為能力として理解されてきた。しかし、各女性たちが取りうる選択肢や実践の可能性そのものは、ジェンダー規範、民族差別、家族関係などの社会的条件によって大きく制約されている。そのため本稿では、主体性を単純な逸脱や抵抗としてではなく、制約のもとで意味や役割を問い直し、ケアのあり方を模索していく「再帰的な思案プロセス」の中に立ち現れるものとして捉える。この思案プロセスを具体的に検討するため、本稿では以下の三つの分析視角を設定する。第一に、既存の生活やケアの継続に困難を覚える「行き詰まり」、第二に、それを契機として当たり前とされてきた規範や前提が問い直される「揺らぎ」、第三に、必ずしも大きな行動変化を伴わないかたちでケアの引き受け方や関係性が修正される「調整」である。ここでいう「思案」とは、自身の経験や他者との関係を参照しながら、判断が揺れ動きつつ形成されていく過程を指す。図1は、このプロセスを模式化したものである。なお、これら三つの視角は直線的な段階として進行するものではなく、実際には相互に重なり合いながら展開していくものと考えられる。

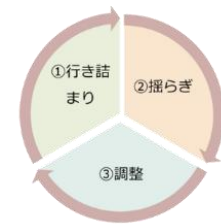


図1 再帰的な思案プロセスモデル（筆者作成）

3. 研究方法：データ収集とデータ分析

本研究は、子育て期にある、あるいは子育て経験を有する30代から60代の在日コリアン女性18名へのライフストーリー・インタビューに基づいている。調査は2023年9月から2025年4月にかけて、東京・大阪・兵庫・名古屋において実施した。インタビューは半構造化形式で行い、主な質問項目は、子育て支援の内容、子育て方針、直面した困難とその対処、自身の子どもの時代の経験などである。本研究の目的は、子育てをめぐる見えにくい判断過程を可視化することにある。そのため、本研究では語りを単なる経験の記述ではなく、現在の視点から過去を意味づけ直す実践として捉え、インタビューにおける回顧的な語りそのものを、再帰的な思案の過程が現れる分析対象とした。具体的な分析手順としては、まず全インタビューデータの逐語録を通読し、対象者が置かれた生活状況や家族背景などの社会的条件を踏まえつつ、語りを①「行き詰まり」、②「揺らぎ」、③「調整」という三つの分析視角から整理した。これにより、判断の前提がどのように揺らぎ、問い直され、さらにケアの引き受け方や関係性がいかに調整されていくのかを検討した。そのうえで、上記の再帰的な思案のプロセスが比較的明確に観察された三事例を中心に、詳細な分析を行った。

4. 事例分析

本節では、分析の中心となる三事例について検討を行う。三者はいずれも子育て期にある在日コリアン 3 世であるが、自身の通学経験や生活条件、配偶者の民族的背景などはそれぞれ異なっている。

(1) P さん：民族的承認をめぐる葛藤

P さんは日本人配偶者との間に生まれた子どもを養育している。自身が韓国名のみを用いて日本の学校に通った経験を持つ P さんにとって、民族的承認は幼少期からの重要なテーマであった。そのため、子どもにも韓国籍を取得させ、家庭内では韓国語読みの名前前で呼ぶなど、民族的アイデンティティの維持を重視した子育てを行ってきた。しかし、子どもが小学校に進学した後、クラスメイトから「韓国人」として認識されず、本人が名乗っても信じてもらえないという「行き詰まり」に直面する。さらに、差別的言動を受けた子どもが不登校となるという事態も生じた。ここで揺らいだのは、「可視化の努力によって民族的承認は一定程度確保できる」という、P さんがそれまで自明視していた前提であった。P さんは「学校に任せてもだめだ」と考え、自身の被差別経験を参照しつつ、差別の歴史や社会構造を家庭内で伝える必要性を強く意識するようになった。他方で、朝鮮学校やインターナショナルスクールへの転校も検討したものの、経済的・地理的条件から断念を余儀なくされている。ここで、民族的承認の基盤を学校（公的空間）ではなく家庭（私的空間）へと置き直すという「調整」が生じる。そのうえで P さんは、学校の提出書類では保護者として韓国名を使用し、子どもの入学式でチマ・チョゴリを着用するなど、制度内部における可視化の実践を継続している。同時に家庭内では、日本の植民地支配や差別の歴史を共有し、子どもが「知らないまま傷つく」ことのないよう、民族的な自己理解を支えるケアを行っている。ここに見られるのは、転校という物理的な環境変更には至らずとも、家庭内外における日常的な実践を通じて、民族的承認のありかたを主体的に再構成していくプロセスである。

(2) Q さん：家父長制のなかでの葛藤

Q さんは在日コリアン同士で結婚し、複数の子どもを養育している。義実家は強固な家父長制的価値観を有しており、Q さんは結婚後、年に数回行われるチェサ（祭祀）の準備を一人で担わされるなど、過度な「嫁役割」を求められてきた。また、家庭内でも長年、家事・育児の大部分を単独で担う状況が続いていた。Q さんにおける最初の「行き詰まり」は、夫の協力を得られないまま義実家からの要求が継続し、心身の負担が限界まで蓄積したことであった。「もう無理」だと何度も感じ、離婚を真剣に検討したエピソードからは、限界状況が反復されていた様子が看取される。ここで揺らいだのは、「自分が我慢さえすれば家庭の調和は維持できる」という、それまで内面化していた前提であった。子どもの成長を契機として、Q さんは自身の過去の選択や、内面化されたジェンダー規範・家族規範を問い直し始める。その際、実父が自発的に家事を担っていた自身の生育家庭の記憶を参照することで、現在の不均衡な夫婦関係を相対化させている。「全部、はいはいと言ってきた」「20 年頑張ったからもういい」という語りには、それまで自明視していた規範への従属から脱却していくプロセスが表れている。その後、Q さんは、義両親との接触を意識的に制限し、夫の扶養の範囲内で就労を開始するという「調整」を行った。「自分のために生きる」という語りは、単なる就労の開始にとどまらず、家庭内における自身の役割の再定義を伴うものである。また、現在において「離婚の可能性」を選択肢として保持している点も、夫とのパワーバランスを変化させる契機となっている。

(3) E さん：日常的な微調整

E さんは、日本人配偶者との間に生まれた子どもを養育している。自身は朝鮮学校出身であるが、子どもには日本の学校を選択した。また、「子どもに寂しい思いをさせたくない」という思いから、専業主婦としてケア役割を専一に担ってきた。E さんにおける「行き詰まり」は、他者との劇的な衝突ではなく、日常的ななかに埋め込まれた「違和感」として立ち現れる。乳幼児期の過重なワンオペ育児の際にも、「母親が 100% 子どもを見るべきである」というジェンダー化された前提を内面化していたため、当初は外部に支援を求めることはなかった。しかし、こうした負担のなかで前提への「揺らぎ」が生じ、子どもたちが未就学児の時期に、保育園の利用やパート就労を始めることで、負担の「調整」を試みていた。子供が小学生となった現在にいたるまでも、新たな気づきや実践が生まれている。娘が学校で自らを「ハーフ」と称した際、担任教師が懸念を示したことに対して不可解さや違和感を抱いたほか、「今振り返るともっと〔実母に〕頼ればよかった」と、自律的な母親規範に縛られていた過去を回顧的に問い直している。さらに、「女の子なんだから」と娘に声をかけたことや、息子の進学において性別役割を前提とした期待を抱いたことに対しても、「今考えるとだめですね」と内省しており、ここには内面化されたジェンダー規範からの認知的な距離化が見られる。現在は、近隣の日本人ママ友とのネットワーク形成を維持しつつ、

家庭内では子どもの民族的な自己肯定感を支える日常的な働きかけも継続している。なお、結婚当初から現在に至るまで、義両親との良好な関係を維持する努力は一貫して継続されている。このように E さんの実践は、劇的な環境変革を伴うものではなく、既存の社会関係を維持・活用しながら、ライフステージの変化に応じてケアのあり方を内側から微細に調整していく点に特徴がある。

(4) 横断的考察

分析した三事例は、いずれも自身を取り巻く構造的制約を無効化できたわけではない。しかし、P さんは民族的承認の基盤を家庭へと「再定位」し、Q さんは家族関係を「再配置」し、E さんは日常のなかで「微調整」を行うなど、女性たちは置かれた状況に応じて異なる形でケアの引き受け方を調整していた。そこには、単なる可視的な行動変化には還元されない、再帰的なプロセスが見出される。第一に、「揺らぎ」をもたらし契機はそれぞれ異なっていた。P さんは学校という制度空間での軋轢、Q さんは家父長制的な抑圧の蓄積、E さんは日常的な違和感の連鎖を通じて、それまで自明視していた前提を問い直している。第二に、「再帰のあり方」にも違いが見られる。P さんは自身の被差別経験を参照しつつ、民族的承認の主たる担い手を家庭へと再定位した。Q さんは、長年の抑圧経験を踏まえながら、生育家庭の記憶を補助線として現在の夫婦関係の非対称性を相対化した。そして E さんは、過去の子育て実践を回顧的に語り直すプロセスのなかで、内面化されたジェンダー規範との距離化を図っている。第三に、再帰的な思案がどのような具体的実践へ接続するかは、各人が利用可能な「資源」や「制約条件」に深く左右されていた。P さんは転校という選択こそ実現できなかったものの、家庭内での独自の民族教育と学校との交渉を組み合わせる実践へとそれを転化した。Q さんは、子どもの成長や就労開始によって制約条件が変化した結果、義実家との距離化や役割の再配置へと進んだ。一方、E さんのケースでは、既存の関係性を維持するための規範への距離化や、ケアのあり方に対する態度変化として表出していた。このように、再帰的な思案は必ずしも劇的な可視的行動に結びつくわけではない。それは認識の再編にとどまる場合もあれば、資源条件との相互作用のなかで個別具体的な実践へ接続する場合もある。ここに、在日コリアン女性の子育てにおける「主体性の多層性」が見出されるのである。

5. 結論

筆者はこれまで、複合的差別構造下にある在日コリアン女性の子育てに注目し、学校選択や家族関係の交渉など、行動として可視化される実践を「主体性」として分析してきた。これに対し本研究では、特定の行動変化に結びつかない場合であっても、子どものウェルビーイングや自身の生活をめぐって熟考し、関係性や可能性を吟味しながら判断を重ねる「再帰的な思案プロセス」が存在することを明らかにした。本稿で示したように、女性たちは民族差別、ジェンダー規範、家族関係、経済状況などの制約のなかで、それまで自明視されてきた役割や前提を問い直していた。そして、その問い直しは、必ずしも劇的な抵抗や行動変化として現れるわけではなく、ケアの担い方の微調整、関係性の再配置、意味づけの変更といった形で展開していた。こうした過程は、たとえ外部からは不可視であっても、確かな主体的実践にほかならない。したがって、主体性は結果として可視化される行動のみに還元されるべきではない。本研究は、構造的制約の内部で前提を揺さぶり、可能性を検討し続ける再帰的過程それ自体を主体性として捉え直すことを試みた。この視点は、在日コリアン女性の子育て実践のみならず、様々な制約のもとに置かれた人々の日常の実践を理解するうえでも、重要な示唆を与えるものである。

6. 引用文献

- 未来を創造する在日コリアン女性ネットワーク.(2018). 第 2 回 在日コリアン女性実態調査—生きにくさについてのアンケート—2016 年 1 月～5 月実施. アプロ.
- ウィックストラム 由有夏.(2025).在日コリアン女性の育児に関する研究—「子どものための学校選択」をめぐる語りを通して.日本の科学者, 60 (4), 182-190.
- ウィックストラム 由有夏.(2026). 在日コリアン女性の子育てにおける社会関係とケアの生成—配偶者との関係性と実家家族とのつながりを中心に. JAILA Journal, 12, 34-47.
- 徐阿貴.(2024). インターセクショナリティの視角からの在日朝鮮人女性研究—交差的抑圧、植民地的家父長制、コミュニティ・アクティビズム. フォーラム現代社会学, 23, 47-55.
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.